



北海道
釧路江南高校

単位制高校の進路指導

生徒と徹底的にかかわる 体系立った指導で 主体的な進路意識を育む

◎1919年に北海道庁立釧路高等女学校として開校。48年に釧路市立女子高校と統合、50年に現校名に改称、男女共学となる。2005年、進学重視型単位制に移行した。校訓は「叡智・希望・慈愛」。「文武一道」を校是としており、部活動加入率は95%。

設立
1919(大正8)年
形態
全日制／普通科／共学
生徒数
1学年約240人
2014年度入試合格実績(現浪計)
国公立大は、小樽商科大、北見工業大、北海道大、北海道教育大、弘前大、筑波大、千葉大、東京学芸大、鹿屋体育大、釧路公立大、名寄市立大、島根県立大などに延べ48人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、中央大、同志社大、立命館大、関西大などに延べ265人が合格。
住所
〒085-0051 北海道釧路市光陽町24-17
電話
0154-22-7987
Web Site
http://www.k-konan.hokkaido-c.ed.jp

変革のステップ

背景

◎素直な半面、主体性に欠ける生徒の学力と進学実績の向上を目指して単位制を導入

STEP 1

実践

◎日常的な面談や「進路シラバス」の作成、2人担任制など、生徒に徹底的にかかわる指導を実践

STEP 2

成果

◎視野を広げて道外の大学を進学先に選ぶ生徒が増加。進学実績の向上につれて教師の指導もより積極的に

STEP 3

徹底的に手を掛ける指導で
2割の生徒が国公立大合格

北海道釧路江南高校が進学重視型単位制高校となったのは、2005年度のこと。単位制の研究指定を2年間受けた後、全校で協議した上で、単位制高校となった。その背景には、進学実績向上の起爆剤にしたいという教師の思いがあったと、進路指導部長の山崎健先生は言う。

「本校は地域有数の進学校として期待を集め、生徒も部活動や行事に一生懸命取り組んでいましたが、他地域の進学校に比べて、生徒を伸ばし切れていないのではないかとという声もありました。単位制による多様な選択科目の設置、教師の加配を生かした少人数授業などを通して、生徒の学力向上を図ろうと、全校一致で単位制導入を決めました」

同校は北海道の中でも比較的早い時期に単位制に移行した。そのため、モデルとする学校が少なく、試行錯誤を続けながら、釧路江南高校にふさわしい単位制のあり方を模索してきた。

その過程で見いだした1つの方向性が、「徹底的に手を掛ける進路指導」だ。選択科目の履修指導、志望校選択などの過程で、教師が生徒と徹底的にかかわり、生徒が自分の将来像を思い描けるようになることにこだわった。同校がここ数年、進学実績を伸ばし、13・14年度には国公立大合格者が1年次の生徒数の2割に達し

たのも、この手厚い指導の成果だ。進路指導部で1年次を担当する加藤渉先生はこう話す。

「本校の生徒は、良くも悪くも素直です。教師の言うことをよく聞き、言われたことをきちんと言う一方、主体性が希薄な点が大きな課題です。そうした中でも徐々に成果が出始めているのは、面談や履修指導、課外学習など、教師が徹底的に手を掛けることで生徒の意欲を高め、『頑張ろう』という気持ちを喚起しているからだと思っています」



山崎 健 やまざき けん
北海道釧路江南高校
教職歴27年。同校に赴任して14年目。進路指導部長。「自分の足で立ち、頭で考え、手を使って、人生を組み立てられる生徒を育てる」



加藤 渉 かとう わたる
北海道釧路江南高校
教職歴14年。同校に赴任して8年目。進路指導部1年次担当。「広い視野とバランス感覚、熱意のある指導と冷静な分析で、指導をしていきたい」



佐藤 明彦 さとう あきひこ
北海道釧路江南高校
教職歴13年。同校に赴任して8年目。教務部3年次担任。「教育の精神は花を育てる雨土の如し」。生徒の可能性を信じ、じっくり育てたい」



増井 誠一 ますい せいいち
北海道釧路江南高校
教職歴10年。同校に赴任して3年目。進路指導部2年次担任。「生徒の手本となるよう、全力で生徒と向き合う」

独自の「進路シラバス」で 早期かつ短期間で進路意識を醸成

同校が最も力を入れているのが履修指導だ。2年次に向けた科目選択の履修指導が始まるのは、1年次の6月。それを受けて、11月までに志望学部・学科、少なくとも文理の方向性を決める。2年次では11月までに生徒全員が志望校・学部を表明し、3年次に向けた履修登録を行う。つまり、2年次11月には事実上の「志望校宣言」が出来るほどに、進路が具体化している。

当然のことながら、3年次での志望変更はハードルが高い。履修のやり直しは出来ないため、入試方式の選択の工夫や、受験可能な科目のある大学への志望変更などで乗り切らなければならない。そのため、低年次の時に、どれだけ具体的に自分の将来像を思い描けるかが鍵となる。3年次担任の佐藤明彦先生はこう述べる。

「入学時点では、生徒の大半が将来像を描けていません。自分はどう生きたい、だからこの科目を履修するというように、主体的に科目選択を行えるよう低年次からの意識付けが不可欠です」

早期に目的意識を醸成する工夫の1つが、14年度に導入した同校独自の「進路シラバス」だ。10年後の自分を思い描いた上で職業調べ、文理選択、大学調べへと進む(図)。1年次4月から「総合的な学習の時間」でキャリア学習に取

り組み、履修指導が始まる6月までの3か月間で、自分の将来像を考えさせる。運用に当たっては、加藤先生が指導案を毎週作成して、担任に配布。次回の授業の狙い、教材の使い方を説明することで各学級の足並みをそろえた。

「なぜその大学なのか」 面談で生徒に徹底的に考えさせる

「進路シラバス」での指導は、あくまで「入り口」に過ぎないと加藤先生は強調する。

図 「進路シラバス」の「キャリア学習の手引き」コンテンツ

第1編 キャリア学習の手引き

- 第1回 私の職業適性を探ろう ～「職業適性検査」を受検する
- 第2回 現在の私と未来の私を考える ～ワーク「現在の私」「10年後の私」
- 第3回 私の職業興味を考える ～KJ法による職業興味探索
- 第4回 私の希望職種と適性職種を知ろう ～「職業適性検査」結果の分析
- 第5回 気になる職業の内容を調べよう ～「マナビジョン」の活用
- 第6回 現在の学力状況を確認しよう ～「スタディーサポート」の分析
- 第7回 適性学問分野を探ろう ～「文理適性検査」の受検
- 第8回 適性学問分野を知ろう ～「文理適性検査」の結果分析
- 第9回 気になる上級学校を調べよう ～上級学校調べ
- 第10回 社会人の経験を知ろう ～社会人講話
- 第11回 進路へ向けた情報収集をしよう ～校内進路説明会へ参加する
- 第12回 目標上級学校等を選定しよう

*学校資料から抜粋して編集部で作成

「『進路シラバス』は全体の基調講演のようなもの。これだけで生徒が自分で考え、動くようになるわけではありません。大切なのは、教師が生徒とどれだけ対話を重ねたかです。生徒の進路意識をより深めていくためには、教師との綿密なコミュニケーションを取ることが何よりも大切なのです」

二者面談、三者面談の他、掃除の時間、廊下ですれ違った時など、日常生活のあらゆる場面で面談の場となる。内容は、履修登録前なら将来像や大学・学部について、登録後なら学習の仕方など、時期によって異なる。

「生徒には『なぜその大学を選ぶのか』を何度も問い掛けます。志望理由があいまいな状態で3年次に向けた履修登録をさせることはありません。生徒をどれだけ揺さぶり続けるかが、進路選択のミスマッチを防ぐことにつながるのです」(佐藤先生)

学校生活の至るところで進路意識を高めていこうと考えている同校では、授業も自ずとキャリア教育を意識した内容となる。

「数学を入試突破の道具として捉えるのではなく、どのように人生に生かしているかを考えさせたいと思っています。数学的な思考力が身に付けば、おのずと物事を論理的に考えられるようになり、話す力も高まります。人生の礎になるような学びを意識できるように、生徒に語り掛けています」(佐藤先生)

英語科で2年次担任の増井誠一先生は学習への向き合い方を生徒に語っている。

「社会に出れば1人で解決せねばならない問題が山ほど出てきます。自分で情報を集め、新たな知識を得る習慣は、ますます必要になるでしょう。高校時代に学ぶ姿勢や学習習慣をしつかり身に付けておくことが、時代の変化に応じてたくましく生きていくためには必要だと、生徒に語り掛けています」

14年度の1年次では、よりきめ細かい指導を徹底するために、「総合的な学習の時間」で分野別の進路学習会も実施した。年次団が話し合い、学問分野ごとに進路指導の基本方針をまとめた。各分野を学ぶには、どのような大学・学部があるのか、入試にはどのような科目が必要かを洗い出した。また、「この分野は道外にある大学でしか学べない」などの情報を共有した上で、進路指導の細かな方針を確認し、担任間の指導のぶれをなくすように努めた。その上で、文系、理系、看護系などの担当者を決めて、希望分野別にガイダンスを実施した。

2人担任制でより手厚い進路指導を実践

より手厚い指導を実現するために、13年度、同校では学校組織を大幅に改編した。2人担任制の導入である。正・副担任という軽重を付け

ず、1学級に同じ立場の担任を2人付け、HRや進路指導など、あらゆる担任業務に同等の責任を持たせた。

「担任1人では全ての生徒を把握できないこともあるため、2人担任制の導入は効果的です。また、複数の視点で1人の生徒を見ることで、生徒が多様な価値観に触れる機会も増えると考えました」(加藤先生)

担任の組み合わせは年次主任による。研修や出張などで2人が同時に学校を不在にすることがないよう、教科や部活動が重複しない組み合わせにし、最終的には、教師一人ひとりと面談をした上で決めている。役割分担は学級ごとに決める。HRは2人一緒で行うのが普通だが、各教師が日替わりで務めてもよい。面談は2人で学級の生徒全員と行う場合もあれば、出席番号別、志望別などに分け生徒を半分ずつ担当し、前・後期で入れ替えて実施する場合もある。

「担任が互いに引いてしまうと責任の所在があいまいになり、かえって学級経営がうまくいけなくなってしまう。各自が責任を持って積極的に指導に当たり、生徒のために主張すべき時は主張するという意識を持ち続けることが大切です」(佐藤先生)

職員室では年次ごとに固まり、ペアを組む2人の担任が向かい合って座るようになった。おのずと学級の生徒について会話を交わす機会が多くなり、職員室の雰囲気もがらりと変わった。

もちろん、2人担任制ならではの難しさもある。導入1年目に初めて同校で担任を持った増井先生はこう話す。

「基本的な指導方針は年次団で共有していますが、経験や人柄によって考え方や指導のスタイルは異なります。時には担任2人の意見が全く異なり、調整が難しい場合もあります。多様な考え方に触れるという意味では、我々教師にとっても毎日が勉強です」

教師の指導スタイルの違いが生徒の履修指導に影響を与えないように、14年度の1年次では2人の担任のうち、同校での担任経験の長い教師を「履修担当」にした。

「教師の多様性を認めるのは大切ですが、履修に関しては出来るだけ学校の方針に基づいて一本化することが理想です。履修担当は学級の履修指導を主導するだけでなく、履修指導に関する年次の方針を決める会議にも出席し、担任間で方向性を共有できるように配慮しました」（加藤先生）

生徒の視野が広がり 道外の大学を選ぶ生徒が増加

きめ細かい進路指導で実績を上げ続けている同校。近年は合格者数の増加だけでなく、志望校のエリアが顕著に広がっている。北海道は生徒・保護者とも地元志向が強く、これは釧路地

域も例外ではない。しかし、同校では関東を中心に道外に目を向ける生徒が年々増えている。

「担任があえて道外を勧めているわけではありません。進路学習によって生徒の視野を広げ、何をしたいのかを面談で徹底的に問いつけた結果、北海道を出るという選択に至っているのです。最初は道外の学校を志望することに反対している保護者も、生徒自身が目的意識を持ち、その覚悟を伝えれば、教師が説得しなくてもおのずと了承するようになります」（佐藤先生）

生徒の変化に応じ、教師の意識も変わった。「先生方が朝学習や放課後補習、土曜日講習などの課外学習を積極的に行う場が増え

ました。生徒の頑張りを見て、生徒をもっと支援しようという意識が高まっているのだと思います」（山崎先生）

生徒の進路意識の高まりが、教師や保護者の意識も変える好循環を生んでいるのだ。教師は必ずしも現状に満足しているわけではない。

「進学実績の伸びは成果の1つですが、あくまで教師が徹底的に手を掛けた結果にすぎません。主体性の涵養（かよう）という意味では、理想の実現にはまだ遠いのが現状です。これから引き続き、生徒の主体的な学びを引き出す工夫を重ね、『これが釧路江南高校の指導だ』と自信を持って言えるスタイルを構築していきたいと考えています」（加藤先生）

情熱 若手教師が語る、指導変革への

自分自身が成長できた 先輩教師との出会い

2年次担任 増井誠一

前任校は大学進学者がいない学校で、そこで8年間勤務してから、3年前に本校に赴任しました。進学校は初めての経験で、受験指導をしたことはありませんでしたが、同じ年次になった2人の先輩の先生から、進学校における「指導の型」を徹底的にたたき込まれたのは幸運でした。

また、先輩方は朝早く出勤する私を見て、「0時間講習」を企画してくださいました。教室が満杯になるほど生徒が集まったことは忘れられません。更に、英語が苦手な生徒に、私のところに質問に行くように声を掛けてくれました。今も続く個別指導のシステムが出来たのも、2人の先生の支援があったからです。

進路指導では「数字はうそをつかない」という考え方を教わりました。先輩方のすごいところは、データ一辺倒で指導するのではなく、生徒にとことんかかわって、彼らの心をしっかりとつかんでいることです。生徒の心に火をつける指導が出来ているからこそ、客観的なデータを使った指導が生きてくることを学びました。

先輩方の指導をどんどん吸収して、生徒の心をつかめる教師になりたいと思っています。主体性の低さが本校の生徒の弱点ですが、やれば出来る生徒はたくさんいます。教師が徹底的に生徒とかがわり、彼らの心に火をつけることで、生徒たちの可能性も広がっていくのではないのでしょうか。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2008年12月号指導変革の軌跡「北海道札幌旭丘高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け